

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：32683

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26883009

研究課題名(和文)同性愛者専門雑誌の言説にみる同性愛解放運動の影響の研究

研究課題名(英文)A study of the effects of discourses on Gay magazines to gay movements

研究代表者

石田 仁 (ISHIDA, Hitoshi)

明治学院大学・社会学部・研究員

研究者番号：40601810

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：同性愛者専門雑誌の言説が同性愛解放運動に与える影響は限定的であった。理由は大きく次の2点による。第一に、同性愛に関する重要な訴訟をめぐる言説があったが、刑事訴訟から国家賠償訴訟へと論点が行き渡るに従い、読み手の関心を失い、のちの運動に論点や経験が接続できなかったためである。第二に、雑誌にあらわれる同性愛者の「生きづらさ」は成人男性が感じる寂寥感や孤独感(「ダンディズム」)として解釈されていたためである。男性の「成熟」と女性性の排除から成り立つその感覚は、他の解放運動、例えばレスビアンとの共闘といった方向性を持ちえなかった。

研究成果の概要(英文)：That the effects of discourses on Gay magazines has on the gay liberation was limited. The main reasons are two following points. The first, as the focus of discourses about a significant litigation's related with homosexual varied from criminal action to state compensation lawsuit, magazines' readers made themselves be less interested, so that could not inherit issues and experiences on gay movement. The second, because magazine readers often said were interpreted the "difficulty in living" in the discourses as a sort of loneliness feeling of adult man particularly ("dandy-ism"), the feeling based on the feeling which "matured" man may be felt and the elimination of women could not connected with social movement and solidarity others (e.g. gay women).

研究分野：セクシュアリティ

キーワード：同性愛 セクシュアリティ

1. 研究開始当初の背景

同性愛の解放運動(レズビアン/ゲイ・リベレーション)は、エイズ報道によって高まる同性愛者への差別・偏見に戦うために1980年代後半に登場した。90年頃は「ゲイ・ブーム」と相互作用しながら日本で認識されはじめ、90年代後半には複数の研究書が刊行⁽¹⁾された。この運動・研究実践によって、同性愛を差別や人権の問題として語る事が可能になり、同性愛者自身による可視化(カミングアウト)が政治的手段として提起され、また、同性愛を定義する性的指向は生得的で変更不可能な属性であるという考えがもたらされることになった。現在では、プライドを持ち、あるいはカミングアウトをし、自分のセクシュアリティは生まれつきの性質であると語る同性愛者も少なくない⁽²⁾。このことから、同性愛に関する新しいとらえ方は90年代に登場し、一定程度浸透したと言える。さらに学術的なレベルでは、セクシュアリティの歴史的相対化、アイデンティティの脱構築、非対称性や不可視性といった視座が一層に意識されることで、レズビアン/ゲイ研究と呼ばれてきたものは、現在ではクィア研究の一角として再編されつつある⁽³⁾。

しかしながら上述のような同性愛に関する新しいとらえ方は、こと同性愛者本人たちに広く支持されてきたとはいいがたい。また現在もそうである。同性愛の解放運動が出てきた時、各種メディアにおける同性愛者の反応はおしなべて冷ややかなものであった⁽⁴⁾。政治的可視化や本質主義・戦略的本質主義に対する違和感が指摘されたこともある⁽⁵⁾。現在においても、可視化と人権化は大きな潮流となっていない。

2. 研究の目的

前述の研究や社会背景に対し、果たして同性愛の解放運動は、同性愛者に大きな言説的影響をもたらしたのか、もし影響が限定的であるとすれば、どのような言説がその阻害要因として働いているのか、この問いに関して実証的に明らかにしていくことを本研究は目的とする。

この問いを明らかにするためには、わずかな例外⁽⁶⁾をのぞいて雑誌記事の先行研究がとばしいために、実際の言説の丹念な調査を必要とする。そのため本研究では、1985年から2000年までの約15年間に刊行された同性愛者のための専門雑誌(以下、同性愛誌)を分析する。85年から2000年までの時期としたのは、86年のエイズ報道によって同性愛差別が激化しそれに対応する形で同性愛解放運動が萌芽したこと、90年代終盤に同性愛の研究書が相次いで出版されたこと、これらをもって1つの時代的な区切りがあったと想定するためである。

3. 研究の方法

研究は、雑誌記事を閲覧し、複写し、分析

する手順を踏んだ。国立国会図書館やいくつかの私設図書館を利用した。研究計画上では、まず平成26年度中に1985年から90年までの記事を、平成27年度には91年から2000年までの記事を、閲覧・複写・分析することになっていた。おおむねその予定通りに作業を進めることができた。

研究の方法は、諸言説の生起・連鎖・変質・置換・無効化等を質的に調べあげていく言説分析を採用する。

研究では、とりわけ、諸言説の考え方の元になり、言説の範型として機能していた言説(範型的言説)の変容に着目しようとした。仮説的には、ある2つの範型的言説(「段階モデル」と「感染モデル」)が、同性愛解放運動以前の80年代において同性愛者を劣等視・病理視させていたが、解放運動の本質主義的な性的指向概念に置換され、無効化されていったと考えた(申請時)。

なお「段階モデル」とは「人は自己愛 同性愛 両性愛の順に発達し、同性愛は一過性の現象である」として同性愛をとらえるモデルであり、「感染モデル」とは「同性愛者との(性的交渉によって)同性愛がうつる(染め上げられる、その道に引き込まれる)」として同性愛を考えるモデルである。

ただし、日本の同性愛者間では今なお、可視化や人権化という視点は主流化しておらず、何らかの阻害的な言説が解放運動の影響を限定的にしていると考えられるため、具体的な阻害言説についても明らかにする。

また、研究課題の対象となる言説において運動の連帯可能性は論じられていたのかについても明らかにする。これを調べることで、当時の運動・論点の多面性をとらえ、また、他の差別研究に一定のインプリケーションを与えることができると考えたためであった。

4. 研究成果

本研究は1985年を起点とするが、その時代の言説は突然生じたものではなく、それ以前の時代や言説状況のある程度反映していると考えられる。しかしながら90年代以前の運動や思想をめぐる言説や事件の状況についてはほとんど明らかになっていないため、85年以前の状況も含んで研究を行った。とりまとめた内容は、「LGBT 運動史研究会」や「性欲研究会」等で発表した。とりわけ次の点が新たに明らかになった。時代順に示す。

1950年代、頒布誌『アドニス』において、若者との刹那的・享乐的な性交渉を強調する菅谷梁三と、全人格的な人的交流および解放を指向する三井竜一との間で誌上論争があった。

1960年代から80年代初頭にかけて東郷健がフェミニスト(駒尺喜美や田中美津ら)との共闘を模索していたことが明らかとなった。この萌芽的な共闘は一部で成果がみられたものの(エポナ出版から複数の書物を発刊

するなど、90年代の同性愛解放運動の規範にはなりえなかった。理由としては、東郷のゲイ観が「ゲイの道に入る/ゲイの道をきわめる」「ゲイにさせられる/させる」というものであり、(戦略的)本質主義を基礎とするゲイ・リベレーションは、「感染モデル」に近い東郷のゲイ観を採用しづらかったからではないかと思われる。

80年代前半では同性愛誌『アドン』で注目すべき動きがあった。定説によれば、『アドン』が運動誌的な色彩を帯びるのは、編集長南定四郎によるILGA日本支部の設立、80年代後半以降であると考えられてきた。しかし、言説を渉猟した結果、兆候はそれより早いことがわかった。『アドン』では79年頃から「偉大なる男たち」という名で著名な同性愛者の列伝の連載を開始した。また、同じころに同誌は、ハーヴェイ・ミルクの暗殺やカミングアウトに関する記事を読者の感想をそえて断続的に報道していた。

82年頃にはそれまで『アドン』発刊元のコバルト社の雇われ編集長だった南が、同社の新雑誌の創刊をめぐる対立し、皆出版として独立した。独立という経験を通じて、異性愛資本体制と闘う姿勢を明確に打ち出し、読者もその件を応援していたことが分かった。ここに80年代前半の同性愛誌における言説が与える同性愛解放運動への影響がみてとれる。

他の差別問題との共闘に関しては、73年に事件が起こり、88年に裁判が結審した「富士高校放火事件」の詳細を対象言説から追うことができた。本件は、同性愛者であり定時制高校の生徒A氏が警察に放火事件の被疑者として逮捕・起訴された誤認逮捕事件であるが、これまでのLGBT研究ではまったくとりあげられてこなかった事件である。いくつかの同性愛誌の閲読から、事件は、同性愛者・性病罹患経験者・定時制高校生徒・被差別部落出自者といった弱い立場を警察が利用して、取り調べの過程で虚偽の自白をするよう迫ったものであったことが分かった。当時決起された被疑者A君を守る会の運動は、同校の全日制の生徒が中心となり、さまざまな属性および状況にある人々に担われた。つまり、複合差別に抗う連帯の運動として、特記すべき事案であった。しかし同性愛誌においては、刑事訴訟一審が判示されたあと、はじめて記事が出るなど、リスクをおかしてまで援護をしたわけではなかったと言える(一審勝訴後、手記が組まれるなどはした)。また、同事件において刑事訴訟が結審し、80年代中葉に裁判が国家賠償訴訟へと移ると人々の興味は急速に減退し、同性愛誌でほとんど報道されなくなった。このため、同性愛誌の報道が同性愛解放運動に影響を与えたかもしれない可能性は閉ざされることになった。

その数年後に提訴され、日本の同性愛解放運動の世界的に知られた1つの成果となった府中青年の家事件の裁判は、富士高校放火

事件の後半の裁判と同じく、国家賠償請求を論点とした訴訟であった。しかしながら、マジョリティ社会の側の者との連帯による共闘といった知見や、担当弁護士をはじめとする人的資源の継承など、富士高校放火事件の諸資源がほとんど受け継がれなかったことはいくぶん不思議である。このことについてもしこれ以上を見ようとすれば、雑誌記事のみを対象とする言説分析では限界があるため、当時の関係者に聞き取り調査をするなどして補っていく必要がある。

なお、仮説として提示した「段階モデル」は、言説の中に潤沢にあらわれてこそ、検証が十分にできなかった。しかしながら「段階モデル」は、通俗性欲学をベースとした1950年代の風俗雑誌や1960年代の一般雑誌の同性愛の記事においてよく見られる言説であり、70年代以降も性科学者がよく使用していたので、同性愛誌においても、当該言説は、本研究の対象時代より前となる70年代中葉頃まではよく出現した可能性をもつ。この言説の退潮を検証するには、そうした前の時代の言説の研究が必要である。

これに対し、申請当時想起しなかった言説を見つけることができた。それは、男性同性愛者の孤独感や寂寥感(現代でいうところの「生きづらさ」)をめぐる言説であり、男性同性愛者の記者や読者は、孤独感や寂寥感を主訴とするこの生きづらさの感覚を「ダンディズム」と結びつけて語っていたことが明らかとなった。

「ダンディズム」は精神的に成熟した成人男性でなければ感じるできない特権的な感覚として理解されたうえに、女性を視野から排除する(あるいは女性を仮想敵とする)ことで成立するために、その「生きづらさ」が現状の社会への異議申立てへと転化されることはなかったし、女性やレズビアン女性と連帯する可能性をも閉ざすことになった。このため、同性愛誌における寂寥感・孤独感を「ダンディズム」として解釈する言説は、同性愛の解放運動に影響を与えなかったばかりか、阻害言説として機能したとすることができる。上述の「生きづらさ」が運動に接続するのは2000年代であることが予想されるので、この点を検証する場合は、より新しい時代の研究を行う必要がある。

以上から、1980年代中葉から1990年代末にかけての同性愛誌における諸言説は、複合差別など注目すべき論点を含みながらも、同性愛解放運動には部分的な影響を与えなすぎなかったことが明らかとなった。

文献

- (1) ヴィンセント, キース・風間孝・河口和也 1997『ゲイ・スタディーズ』青土社ほか。
- (2) 石川大我 2002『ボクの彼氏はどこにいる』講談社ほか。
- (3) Suganuma, Katsuhiko, 2012, *Contact Moments*, Hong Kong U.P. ほか。
- (4) 『週刊文春』88年5月5日号、205-6

頁ほか。(5) 関修・木谷麦子編 1999 『セクシュアリティ入門』夏目書房、杉浦郁子 2002 『『レズビアン』という自己：語られる差異とポリティクスをめぐって』好井裕明・山田富秋編 『実践のフィールドワーク』せりか書房、伊野真一 2001 『構築されるセクシュアリティ：クィア理論と構築主義』上野千鶴子編 『構築主義とは何か』勁草書房ほか。(6) Lunsing, Wim, 1995, "Japanese Gay Magazines and Marriage Advertisements," *Journal of Gay & Lesbian Social Services*, 3(3)、Mackintosh, Jonathan, 2011, *Homosexuality and Manliness in Postwar Japan*, Routledge、前川直哉 2015 『1970年代における男性同性愛者と異性婚』小山静子他編 『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会 ほか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

石田 仁、富士高校放火事件の再構成：複合差別、セクシュアリティ、(トランス)ジェンダー、現代思想、査読無、43 巻 16 号、2015、231-245 DOI:なし

石田 仁、富士高校放火事件から考える複合差別：(第1回)事件のあらまし、ヒューマンライツ、332号、2015、56-60 DOI:なし

石田 仁、富士高校放火事件から考える複合差別：(第2回)裁判のあらまし、ヒューマンライツ、333号、2015、60-63 DOI:なし

石田 仁、富士高校放火事件から考える複合差別：(第3回)重層的差別、ヒューマンライツ、334号、2016、42-46 DOI:なし

石田 仁、富士高校放火事件から考える複合差別：(第4回)放火の動機と同性愛、ヒューマンライツ、335号、2016、42-47 DOI:なし

石田 仁、富士高校放火事件から考える複合差別：(第5回)複合差別、ヒューマンライツ、336号、2016、54-61 DOI:なし

石田 仁、富士高校放火事件から考える複合差別：(第6回・最終回)清濁併せのむ研究ノ運動であるために、ヒューマンライツ、337号、2016、47-51 DOI:なし

鹿野 由行・石田 仁、戦後釜ヶ崎の周縁的セクシュアリティ、薔薇窗、26号、2015、11-40 DOI:なし

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

石田 仁 (ISHIDA, Hitoshi)

明治学院大学・社会学部・研究員

研究者番号 40601810